

腫の aggressive relapse ではなく新たな合併と診断され、CHOP 療法 6 コースにより CR となった。その後再発し DeVIC 療法 3 コースなど治療したが、骨髄浸潤などにより 2007 年 8 月死亡した。

十二指腸の MALT リンパ腫では濾胞性リンパ腫との鑑別、胃や小腸病変の有無、*H. pylori* 感染との関連と除菌効果など症例を重ねて、発生部位や形態による検討が必要である。

#### 14 同一病巣内にコレステロールポリープと胆嚢癌を併存した胆嚢隆起性病変の 1 切除例

佐藤 宗広・塩路 和彦・佐藤 祐一  
野本 実・青柳 豊・佐藤 良平\*  
金子 和弘\*・若井 俊文\*  
白井 良夫\*・畠山 勝義\*  
新潟大学医歯学総合病院第三内科  
同 第一外科\*

胆嚢コレステロールポリープは胆嚢隆起性病変の中で最も頻度が高い疾患であるが、コレステロールポリープと胆嚢癌を同一病巣内に併存した症例の報告は極めて少ない。

症例は 70 歳代、男性。

【現病歴および経過】2001 年、健診の際に肝機能異常を指摘され近医受診し、腹部超音波検査(US)にて胆嚢頸部に直径 13mm (有茎性・桑実状・高エコー)、他に数 mm、数個の胆嚢ポリープを指摘された。某院で MRCP (磁気共鳴胆道膵管造影) を施行したが評価困難であった。2002 年、ポリープの大きさは不変であったが当院内科を受診し、MRCP 施行したが呼吸止め不十分なために評価は困難であり経過観察となった。US にてポリープはゆっくりであるが増大傾向を認め、2007 年、当院の CT 検査では直径 18mm、2008 年 3 月には直径 22mm とさらに増大したため悪性の可能性も否定できず、胆嚢摘除を目的に当院外科を受診した。逆行性胆管造影にて胆嚢頸部に 18×15mm の陰影欠損を認め、辺縁不整で凹凸であり胆嚢癌を疑った。超音波内視鏡検査ではポリープ表面は乳頭状、内部には低-高エコーが混在するが比較的均一なエコー像を呈し胆嚢癌を第一に考

えた。胆嚢癌の疑いのもと、2008 年 5 月 27 日、当院外科にて開腹下に胆嚢切除+リンパ節郭清を行った。

【手術所見】胆石はなく、肉眼的には黄色調・顆粒状・有茎性でコレステロールポリープであった。病理組織学的検査にて同一隆起性病変内に胆嚢癌とコレステロールポリープを認めた。

#### 第 267 回新潟外科集談会

日 時 平成 20 年 12 月 6 日 (土)  
午後 1 時～4 時 18 分  
会 場 新潟大学医学部 有壬記念館

#### 一 般 演 題

- 1 超音波ガイド下に整復後、待機的に腹腔鏡下修復術を施行した男性閉鎖孔ヘルニアの 1 例  
畠山 悟・小林 孝・松澤 岳晃  
新潟臨港病院外科

症例は 96 歳、男性。前夜からの腹痛、嘔気を主訴に近医受診し、腸閉塞症の診断で、同日当科を紹介され受診した。腹部 CT で右閉鎖孔ヘルニア、小腸嵌頓による腸閉塞症と診断した。腹膜炎の所見無く、CT では腹水を認めず、嵌頓している小腸壁の造影が良好であったことから嵌頓腸管に穿孔や強い虚血性の変化は認めないと判断し、超音波ガイド下に嵌頓整復した後、経過観察目的に入院した。腸閉塞は解除し、その後の諸検査にて全身麻酔や手術に支障となる合併症を認めなかったため、入院 5 日目に待機的に腹腔鏡下ヘルニア修復術を施行した。術後経過は良好で退院した。男性の閉鎖孔ヘルニアに対し超音波ガイド下に非観血的整復後、待機的に腹腔鏡下ヘルニア修復術を

施行し、良好な結果が得られた症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

## 2 閉塞性腸炎を伴う進行大腸癌に対して二期的に腹腔鏡手術を施行した1例

佐藤 洋・富田 広・矢島 和人\*  
 県立坂町病院外科  
 新潟大学第一外科\*

症例は82歳、女性。嘔吐・腹痛を主訴に入院。腸閉塞および閉塞性腸炎を併発した進行S状結腸癌と診断され、準緊急で腹腔鏡下手術を施行した。閉塞性腸炎を併発していること、高齢であることなどから一期的な吻合を避け、Hartmann手術を選択した。進行度はStage IIであった。術後順調に回復し、再発もみられないため、6ヵ月後に腹腔鏡下での人工肛門閉鎖術を施行した。腹腔内には癒着は認めず、安全且つ短時間に再吻合を行うことができた。術後合併症なく退院し、外来通院中である。腹腔鏡手術は手術時の創の小ささや低侵襲にばかり目がいくが、再手術の時にこそその威力を発揮する。本症例のように鏡視下で二期分割に手術を行う報告も今後増えてゆくものと考えられる。

## 3 当科における腹腔鏡下虫垂切除術の治療成績

前田 知世・亀山 仁史・澤岷 安勝  
 横山 直行・山崎 俊幸・桑原 史郎  
 大谷 哲也・片柳 憲雄

新潟市民病院外科

当科では、膿瘍形成を認めない急性虫垂炎に対しては、腹腔鏡下虫垂切除術(LA)を第一選択としている。当科のLAの成績から、今後の課題につき検討した。

急性虫垂炎の診断で腹腔鏡手術を行った109例(男58例・女51例・中央値35歳)と術前明らかな膿瘍を認めない開腹手術(OA)72例(男32例・女40例・中央値39歳)を比較した。手術時間中央値は、LA群61分、OA群43分( $p < 0.05$ )であった。LA群に手術時間とBMIとの相関はな

かったが、B群で相関を認めた。術後入院日数はLA群5日、OA群8日( $p < 0.05$ )であった。穿孔例のLA群では、創感染は低頻度であったが、術後膿瘍は高頻度であった。

LAは、在院期間の短縮が得られ、肥満者には良い適応と考えられた。穿孔例の術後膿瘍対策が、今後の課題である。

## 4 直腸肛門部悪性黒色腫の4例

太田 一寿

太田西ノ内病院外科

直腸肛門部悪性黒色腫は、同部悪性腫瘍の0.1~0.5%と稀な疾患で、早期に血行性、リンパ行性に転移し、きわめて予後不良である。今回4例経験したので、文献的考察を加えて発表する。

4例共女性、45~70歳、主訴は3例で下血、1例は肛門部違和感。いずれも肛門部直上に腫瘤あり、3例は隆起型で術前診断がつき、Mils'opを行った。1例は粘膜下腫瘍様で、術前診断がつかずLARを行った。ss2例、sm1例、m1例。3例はリンパ節転移なく、2例は脈管侵襲なし、1例は不明。1例はリンパ節転移、脈管侵襲陽性で、術後1年3ヶ月多発転移にて死亡。sm浸潤例は、約7年で再発転移し、7年6ヶ月目に死亡。粘膜下腫瘍様、ss浸潤例は、約5年後再発し切除、6年5ヶ月生存中。もう1例は、1年4ヶ月再発転移なく生存中。

長期生存には、早期に発見し、早期に手術を行うべきである。

## 5 婦人科腫瘍に対して骨盤内臓全摘術を施行した6症例

岡本 春彦・高橋 元子・永橋 昌幸  
 小野 一之・田宮 洋一・児玉 省二\*  
 県立吉田病院外科

県立がんセンター新潟病院婦人科\*

2004年2月から婦人科腫瘍に対して骨盤内臓全摘術を施行してきたが、その結果について報告する。